

誇らしい伝統 ～全校で取り組むエコキャップ運動～

村上市立平林中学校 3年 高野 麻希子

みなさん、「エコキャップ運動」という言葉を聞いたことはありますか。この運動は、世界中の恵まれない子どもたちのためにペットボトルのキャップを集めようというもので、八〇〇個のキャップで子ども一人分のワクチンになります。

私たち日本人は、幼い頃に受けた予防接種のおかげで、ポリオやジフテリアなどの感染症から守られています。でも世界中では、ワクチンを受けられずに、毎年多くの子どもたちが命を落としています。そして、ワクチンさえあれば、これらの子どもたちの多くは命を落とさずにすむのです。

私の学校・平林中学校では、このエコキャップ運動に全校で取り組んでおり、今年で四年目になります。今ではマスコミで大々的に取り上げられ、頻繁に耳にするようになったエコキャップ運動ですが、四年前にはまだそれほど注目されていませんでした。飲んだ後、ペットボトルのキャップは捨てる物という感覚が普通だった時期です。

そんな頃、平林中学校がいち早くエコキャップ運動に取り組んだのには理由がありました。ある先輩が「少年の主張」でエコキャップ運動を呼びかけたのです。その呼びかけに当時の生徒会長が深く賛同し、早速学校をあげての活動が始まったという事です。

私が平中に入学した頃は、すでに「当たり前のこと」としてエコキャップ運動が校内に存在していたので、何も考えずに協力していました。ですが、自分が生徒会長になり、エコキャップ運動が始まったきっかけを知った時、とても驚き、感動しました。一人の先輩の願いや呼びかけを、みんなが「よし！」と前向きに受け止め、それを実際に全校で取り組んでいく。これは決して簡単なことではありません。賛成することは誰にでもできますが、実際に動くとなると様々な困難や大変な作業が出てくるからです。心を一つにして迅速に取り組んだ当時の平中生徒会の団結力と行動力に、尊敬の思いでいっぱいです。

私は今、エコキャップ運動が始まってから四代目の生徒会長として、この活動に取り組んでいます。それぞれの教室に箱を置き、クラス対抗の形で集めたものを、生徒会執行部が月ごとに集計します。毎月集まった数を全校朝会で報告し、年度末にはたくさん集めたクラスに賞状も出しています。そしてもう一つ。その場で「今までワクチンを送ることができた子どもの数」を発表するのですが、その時の全校生徒の温かい拍手は、とても感動的で、「やってきてよかったね。」という思いが体育館にあふれます。全校生徒の心が一つになる瞬間です。私達生徒会執行部も、今までの苦勞がすべて吹き飛んでしまうほど、その拍手には価値があります。このようにして年々活動がさかんになり、今では年間五〇人以上の命を救っています。ワクチンを受け取った子どもたちの声は直接聞こえることはありませんが、でも実際に聞こえてなくても、私たちには、ちゃんと届いている。そんな気がします。それを信じて全校生徒で頑張っています。

この活動を通して、平中の生徒は、ペットボトルを手にとると必ずワクチンを思い浮かべるようになりました。ただ、残念なことに平林中学校の全校生徒数は私が入学してから年々減り続け、現在一一〇名です。しかし、一一〇名の生徒で、年間五〇人以上。つまり二人で一人の子どもの命を救っていることになるのです。

私は、先輩方が築いてくれた誇らしい伝統を守り続けると同時に、さらに多くの人たちに協力を呼びかけたい。そんな思いで今こうして話をしています。

エコキャップ運動の最も素晴らしいところは、「今日からすぐにできるボランティアである」という点です。誰でもすぐに簡単に参加でき、さらにそれが「子どもたちの命を救える」ことになるのなら、こんなに素晴らしいことはないと思いませんか。多くの人たちで取り組めば、きっと短い時間でたくさんのキャップが集まることでしょう。そうすれば、より多くの子どもたちが確実に助かります。

軽くて小さいペットボトルのキャップ。風が吹けば飛んでしまいそうな小さな物ですが、何よりも重い、命を救う力を持っているのです。そしてさらに、世界平和という大きな夢につながっているのです。